



TITLE:

# 日本語の述語時間表現の機構と歴史( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

福田, 嘉一郎

---

CITATION:

福田, 嘉一郎. 日本語の述語時間表現の機構と歴史. 京都大学, 2015, 博士 (文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12905>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	福田 嘉一郎
論文題目	日本語の述語時間表現の機構と歴史		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、日本語の述語部分に現れる時間表現、具体的にはテンス（時制）、アスペクト（相）、パーフェクト等と呼ばれている文法カテゴリについて、それらの機構を明らかにし、また、その歴史的变化を記述しようとするものである。さらに議論の過程で、テンスとムード（叙法）との関わりにも言及する。</p> <p>本論は第I部（第1章～第6章）と第II部（第7章～第9章）に分かれる。第I部では主に現代語の述語時間表現の機構を、第II部では主に日本語の述語時間表現の歴史的变化を、それぞれ取り扱う。</p> <p>1. 「第1章 述語時間表現の概観と研究史」「第2章 静的述語のテンス」「第3章 動的述語のテンス」</p> <p>一般にテンスとは、ある基準時（通常は発話時）と述語が表す事態の時との前後関係によって、述語が体系的に異なる形態をとる文法現象と考えられている。その結果、日本語の「ムードのタ」「叙想的テンス」などと呼ばれるタ形の用法は、テンスで説明できない特異な現象と見なされがちであった。これを受けて、第1章～第3章では、現代日本語の述語時間表現の機構に関して、(1)-(5)のようなことを明らかにした。</p> <p>(1)a. 現代日本語の主節における述語のテンスは、述語が表す事態の時（事態時）と発話時との関係ではなく、述語事態の観察可能時と発話時との関係によって決まる。すなわち、観察可能時が発話時に対して以前なら述語はタ形をとり、観察可能時が発話時に対して同時または以後なら述語は非タ形をとる。</p> <p>b. 述語事態の観察可能時（単に「述語の時」とも）とは、「その時に事態の現場に話者自身がいれば、事態についての直接情報を取得できる」と話者が考える（または実際に直接情報を取得した）時のことである。</p> <p>c. 観察可能時は事態時に含まれるが、事態時の全期間にわたるとは限らない。</p> <p>(2)a. 静的述語は、それが表す事態についての直接情報が静止画として与えられる述語である。観察可能時は時間的な長さをもたない瞬間、点となり、述語事態は状態ととらえられる。</p> <p>b. 静的述語事態の観察可能時が、発話時に対して以前でも同時でもある場合、原則として、発話時と同時の観察可能時がテンスのターゲットとなり、述語は非タ形をとる。</p> <p>c. (2b)の例外として、観察可能時が発話時と同時であるにもかかわらず、発話時以前の観察可能時がテンスのターゲットとなり、述語がタ形をとる場合がある。すなわち(I)-(III)（いわゆる「ムードの『タ』」「叙想的テンス」）である。</p> <p>(I)過去の時を表す副詞類によって、観察可能時が発話時以前に固定された場合。</p> <p>(II)述語事態が観察可能であった発話時以前の時と発話時との間に、事態を観察することが不可能な時があった場合。</p> <p>(III)話者が述語事態についての何らかの情報を得る前に、事態についての情報を得ようとする態度が話者にあった場合。</p> <p>(3)a. 動的述語は、それが表す事態についての直接情報が動画として与えられる述語である。観察可能時は時間的な長さをもった期間、線となり、述語事態は運動ととらえられる。</p> <p>b. 述語動詞の表す動きが、動きに関与するものの状態の変化を伴う場合、動的述</p>			

語事態についての直接情報は、変化の前の場面と後の場面とを含んでいなければならない。

c. 述語動詞の表す動きが、動きに関与するものの状態の変化を伴わない場合、動的述語事態についての直接情報は、原則として、事態の全過程の場面を含んでいなければならない。

(4) 話者が確言の文を用いるための必要条件として、述語事態の観察可能時が発話時以前（過去）、または発話時と同時（現在）である場合、話者は事態の時における事態についての情報、すなわち事態についての直接情報を実際に取得していなければならない。

(5)a. 語り手は、過去に存在したあらゆる事態についての直接情報を取得しうると想定されている話者である。

b. どの話者も、話者自身に関する過去の事態について取得した情報は、すべて直接情報として扱うことができる。

## 2. 「第4章 ラシカッタという言い方について」

現代日本語の助動詞ラシイは、ラシカッタという言い方の存在によって、外界の事態を描き取って表す客体的表現と、描き取った事態についての話者の判断を表す主体的表現の、中間的・両面的性格をもつと解せられることがある。第4章では、このような考え方に対して批判を加えつつ、ラシカッタで終わる文が通常の文法論的解釈の埒外にあり、語りにおいて「語り手の発話時における」以外の判断を表す、特殊な文体の1つと見るべきであることを明らかにした。

…ラシカッタは真性モダリティをもたない…ラシイ（発話時ではなく場面時における語り手の判断を表す）を前提としており、日本語の語りの文体が-タを持つ形を標準とするために、それに合わせて…ラシイを過去形にしたものが…ラシカッタである。ラシイとラシカッタとの関係は、通常の非過去形と過去形の対立とは全く異なる性格をもっている。ラシカッタ（およびカモシレナカッタ、ニチガイナカッタ等）という言い方が、通常の文法論的解釈の枠内で、客体的表現と主体的表現の連続性の証拠として挙げられることは不適切と考える。

## 3. 「第5章 近代語の時の表現—連体法述語の場合」 「第6章 名詞修飾状態的述語のテンス」

現代日本語の名詞修飾述語は、主節述語の時（主節時）を基準とする相対テンスをとる場合と、発話時を基準とする絶対テンスをとる場合とがあり、両種のテンスの出現する条件には不明な点が多い。第5章、第6章ではこの問題について論じ、(6)–(8)のようなことを明らかにした。

(6) 名詞修飾節の述べる事柄が、聞き手にとって既知の情報である（と話者が考え、それを既知情報として扱う）場合、名詞修飾述語は絶対テンスをとる。

(7)a. 名詞修飾述語が表す、ある程度恒常的な過去の状態が発話時現在まで続いている（ことを話者が示したい）場合、名詞修飾述語は絶対テンス（タ形）をとる。

b. (7a)の特殊な場合として、名詞修飾述語が表す状態と異なる現在の状態が既に述べられていると、名詞修飾述語は相対テンス（非タ形）をとりにくい。

c. (7a)の特殊な場合として、名詞修飾節に過去の時を表す副詞類があると、名詞修飾述語は絶対テンスをとらなければならない。

(8) 名詞修飾状態的（静的）述語が表す、主節時（発話時以前）において存在した事態を、話者が主節時において意識に上らせていたととらえることが難しい場合、名詞修飾述語は相対テンス（非タ形）をとりにくい。

#### 4. 「第7章 中古語の述語時間表現とその史的変遷」

日本語のテンス・アスペクト表現に関する研究は、現代語を対象として始められ、その後、通時的研究も行われるようになった。第7章では、「ぬ」「つ」「たり」「り」「き」「けり」を中心に、中古語の会話文の主節における述語時間表現を記述し、現代語の体系へと至る史的変遷を概観した。

##### 4.1 アスペクト

4.1.1 中古語のアスペクト体系は、「ぬ」「つ」を用いた変化相、「たり」「り」を用いた結果相、それらの形式が付かない中立相というアスペクト諸形により構成される。

「ぬ」「つ」、「たり」「り」などの形式が付かない述語は、変化相でも結果相でもないアスペクトの形、すなわち中立相となる。中立相（非変化非結果相）の述語では、話者は事態の時間的な全部を観察しようとする（完成相相当）か、または、事態の開始部でも終結部でもなく（「-ぬ」「-つ」と対立）、終結後でもない（「-たり」「-り」と対立）時間的な一部のみを観察しようとする（不完成相相当）。さらに、述語が特定性・個性を離れた事態群を表す場合（習慣的完成相相当）もある。

4.1.2 中世末期の口語においては、裸の動詞が不完成相（動きの時間的な一部のみを話者が観察しようとする）の意味を表わしえた。江戸時代に入ると、（動詞連用形＋）「て」＋存在動詞（「ある」「ゐる」「をる」など）の形がほぼ文法化し、「てゐ（る／た）」が不完成相の意味を表すようになった。「て＋存在動詞」が、結果の存在（4.2.3参照）に加えて不完成相の意味をも表すようになったことで、動的動詞が「てい（る／た）」を伴う（既然相）か伴わない（完成相）かにより対立するという、現代日本語のアスペクト体系が成立した。

##### 4.2 テンス

4.2.1 中古語においては、変化相の述語のムードが確言であるとき、述語の時が発話時に対して以前の場合も、以後の場合も、述語は同じ形態をとる。また、中立相の述語のムードが確言であるとき、述語の時が発話時に対して以前、同時、以後のいずれの場合も、述語は同じ形態をとる。このように、中古語における確言の変化相述語、中立相述語には、発話時を基準時とするテンスが認められない。

4.2.2 中古語の「き」と「けり」は、ムード形式に前接することがなく、それら自身が一種の判断のムード（回顧）を表す形式といえる。「き」による述語では、話者が事態を実際に観察した時が、述語の時として時間軸上に定位される。また、「けり」による述語では、話者が述語の時より後で取得した事態についての情報（伝聞情報を含む）に基づいて、述語の時が時間軸上に定位される。ムードが「き」「けり」によるとき、述語の時は必然的に発話時以前となる。しかしながら、非推量の述語は述語の時が発話時以前なら「き」「けり」をとる（「き」「けり」が用いられていなければ過去ではない）という原則がないため、「き」「けり」はテンスを表す形式とはいえない。

4.2.3 平安時代のテキストにおいて既に、「たり」を用いた述語で、結果の存在を含意しながら、完成相かつ述語の時が発話時以前とも解釈されうる例が多く見られる。「たり」が変化した「た」という形式の確例は、鎌倉時代から現れる。中古語において、状態を表す述語詞（形容詞、存在動詞など）に「たり」は付かなかったが、室町時代には状态的述語詞に「た」の付いた例が見られるようになる。一方で、中世末期の口語においても動詞に付いた「た」は結果の存在を表わしえた。江戸時代には、文法化した「て＋存在動詞」（4.1.2参照）が結果の存在の意味を担う形式となった。「た」が状态的述語詞にも付くようになり、結果の存在の意味を主に「て＋存在動詞」が表すように

なって、日本語では、基本的にすべての（意志表明や希求でない）判断の述語が、「た」を伴うか「非た」を伴うか（述語の時が発話時に対して以前か非以前か）により対立する、すなわちテンスをもつように変わった。

5. 「第8章 中世末期口語における-テゴザルと-テゴザッタ」

第8章では、日本語のテンスの歴史を論ずる一環として、中世末期口語における、動詞に接尾語-テゴザルが後接した形（Vテゴザル）と、動詞に接尾語-テゴザッタが後接した形（Vテゴザッタ）について考察し、それらの文法的意味を明らかにした。天草本平家物語を中心に、中世末期口語資料に見られるVテゴザルとVテゴザッタの用法を観察した結果、(I)(II)のようなことが知られた。(I)Vテゴザッタは発話時から切り離された以前の事態（〈過去〉）を表す形式である。(II)Vテゴザルには〈過去〉を表す用法と、発話時に結びつけられた以前の動き（〈完了〉）を表す用法とがあり、〈完了〉を表す場合のVテゴザルはVテゴザッタに置き換えることができなかったと考えられる。

6. 「第9章 ロドリゲス日本大文典の『不完全過去』について」

第9章では、ロドリゲス日本大文典の「不完全過去」について考察し、ロドリゲスが日本語の動詞の現在形（非タ形）をポルトガル語の「不完全過去」にあたるとするとき、真に記述しようとしていた言語現象を明らかにした。ロドリゲスが日本大文典で「直説法」の「不完全過去」にあたるとした動詞の現在形は、終止用法の例が資料に見られず、主節の時と同時の、過去の持続的または習慣的な事態を表す連体現在形を指していた（現代語とも共通の現象、第3節参照）可能性が非常に高い。この結論は、日本語の動詞の連体現在形を、ラテン語の未完了過去やポルトガル語の「不完全過去」に置き換えた対訳例が同時代の資料に実在することによって裏づけられる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本語の述語部分のテンス(時制)、アスペクト(相)、パーフェクト等の文法カテゴリの時間表現の機構を明らかにし、その歴史的变化を記述しようとしたものである。

第1部では現代語の時間表現の機構を論じ、第2部では歴史の変遷を論じている。

テンスについて、従来は「命題となる事態が生じた時間」と「基準となる時間(通常は発話時)」との前後関係によって、言語形式が体系的に変わる現象と解されてきた。現代日本語の「-タ」と「-非タ(タの付かない形)」の対立は、テンスであるが、発話時において存在する事態も「-タ」形で表現される場合がある(いわゆる「ムードの『タ』」)。それらについては、これまでテンスは事態の時をターゲットとするという概念から離れられなかったために、明確にテンスの体系内に位置づけることができなかった。第1部第1章から第3章では、テンスのターゲットを「事態時」ではなく、「観察可能時」、すなわち、「述語事態の現場に話者がいて情報を取得できる」、あるいは「取得できると話者が考える時」と規定し、それによって「観察可能時が発話時以前である場合に『-タ』をとり、発話時と同時または以後である場合には『-非タ』をとる」という原則が立てられるとする。そして「ムードの『タ』」等もこの原則によって統一的に処理できることを示した。また、アスペクトについても、現代語では「テイ(ル・タ)」の有無によって対立すると理解されているが、本論文では、両者を「観察可能時」の「性質」の違いとし、「テイ(ル/タ)」の場合は時間的な長さをもたない「瞬間(点)」で、事態は「状態」であり、「テイ」がない形式は時間的な長さをもった「期間(線)」であって、事態は運動と捉えられるとする。そして従来さまざまに分類されてきた「テイ(ル/タ)」の意味を、「動きの開始以後の状態(既然相)」として、一元的に説明することが可能であることを示した。第5章、第6章では、現代語の名詞修飾述語は、主節の述語の時(主節時)を基準とする相対テンスをとる場合と、発話時を基準とする絶対テンスをとる場合とがあるが、本論文では、名詞修飾節で表現されている事態が聞き手にとって既知の情報の場合や恒常的な状態が現在まで続いていることを表す場合などは絶対的テンスをとるなど、これまで問題にされなかった条件を指摘することによって、絶対的テンスと相対的テンスの用いられ方を明らかにしている。

第2部では、時間表現の歴史の変遷を論じている。第7章は中古語のアスペクトを、助動詞「ぬ、つ」の変化相、「たり、り」の結果相、これらが付かない中立相として分析を行い、中世末期に至って、中立相の動詞は「不完成相」をも表し得たが、江戸時代に「てゐ(る/た)」が不完成相を表すようになったこと、また「き、けり」は事態が発話以前であっても「き、けり」を伴わないことがあるため、テンス形式でないとする。そして中古語の述語の時間表現から現代語のアスペクト・テンス体系へと至る史的変遷の概要を、中古語では、確言(事態を真と認めるムード<叙法>)の述語は、述語の時と発話時との前後関係による形態の対立を示さないでテンスをもたないこと、「ヌ、ツ、タリ、リ」を伴わない形(中立相)の動詞は、現代語の「テイ(ル/タ)」と同じ意味の用法を含んでおり、中世以降「タリ」から変化した「タ」が、状态的述語動詞にも後接して「テ+存在動詞」の形で、結果の存在の意味を表すようになり、江戸時代にはその文法化が完了した。その結果、通常の「判断」表現が、「タ」形と「非タ」形と対立し、動きを表す動詞が「テイ(ル/タ)」の付いた「既然相」とそれを持たない「完成相」の対立をもつという現代語のアスペクト・テンス体系が成立したとする。合理的な解釈である。第8章では、キリシタン資料に出現する「~テゴザル」と「~テゴザッタ」を論じ、テゴザッタは発話時から切り離された過去の事態を表し、テゴザルは過去の用法と、発話時と結びつけられた事態としての完了の用法があり、この完了の用法

のテゴザルはテゴザッタに置き換えることができなかったことを示した。第9章ではロドリゲス『日本大文典』の、動詞の現在形（非タ形）をポルトガル語の「不完全過去」として説明する事項について、「直説法」の不完全過去の終止用法の例がなく、日本語の連体形現在時を指していた可能性が高いことを論じている。このような細部にまで目を配り、体系的な記述を心がけているのが特徴である。

以上のように本論文は日本語の時間表現を見直し、「観察可能時」などの新しい視点を導入することによって新しい体系を作り上げ、それを歴史的研究に応用しているところに大きな意義がある。ただし、未だ時間表現の体系全体ではなく、本論文で取り上げなかった現象も体系に取り込んでゆく必要がある。また、術語の説明が不足して、文意を取りにくい所もあったので、はじめにまとめて術語の説明をしておくべきであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年2月10日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。